

峰島旭雄先生のご逝去を悼む

末木 文美士

峰島旭雄先生は、平成二十五年十月十六日、八十五歳でご逝去された。まさに巨星墜つという感慨を禁じ得ない。

比較思想学会は、初代会長の中村元先生とともに、峰島先生のお力に負うところが大きい。学会が創設された頃のことを、先生は次のように記している。

一九七三（昭和四八）年一〇月に、東方研究会の中村元博士からお声がかかった。それは、かねて『比較思想』『比較哲学』の必要を唱えていた金沢の医院経営者で民間の思想家、松尾宝作博士が、「比較哲学と教育」というテーマでシンポジウムを行ってもらいたいとの要請によるものであった。たしか湯島会館（現在の東京ガーデン・パレス）だったと思うが、一室に参集したのは、六名足らずの少人数で、中村博士、松尾宝作博士、末木剛博東大教授（当時）、守屋茂龍谷大学教授（当時）、吉原螢覚神戸商船大学教授（当時）と峰島であった。

この回想によると、このときの討議のあとの会食で、学会創

設を提案したのは峰島先生ご自身で、それが呼び水となって翌年には実際に学会が創設されるに至ったという。先生がこの学会に賭けた心意気を知ることができる。

この中に私の父末木剛博の名前が出てくるが、父はおよそ学会嫌いで、他の学会にはほとんど出たことがなかったが、比較思想学会の会合だけは、いつもいそいそと出かけていた。その度に、帰ってくると、一方で中村元先生の博学に驚嘆するとともに、もう一方で必ず峰島先生の適切な采配ぶりに賛美を惜しまなかった。中村先生の理想だけでは学会はできず、それを現実の場に定着させていったのが峰島先生であった。

峰島先生は、中村先生と似て、小太りでいつも笑顔を絶やさなかったが、中村先生が饒舌と言っているほど次々と話題を繰り出すのに対して、峰島先生はむしろじっくり聞いてからおもむろに発言されるというタイプであった。その発言も、端的にずばりと言うよりは、ふわつと茫漠とした感があり、それがかえって議論百出で収拾がつかないような問題を、うまく纏めて

結論に導く力を持っていた。

先生はいくつもの研究会を指導して若手の育成に努め、また、『比較思想事典』（東京書籍、二〇〇〇）をはじめとする重要な書籍の編集出版を成功させたが、それは、人の和を重んじながら、しかし、筋は曲げずにきちんと纏め上げるといふ、その能力が最大限発揮されたからに他ならない。比較思想学会は、会長になっても、縁の下の力持ち的な謙虚で地味な努力を怠らない先生の活動によって、大きく発展することになった。

そうした人柄は、ご自身の研究の上にも現れている。「思い返せば私の人生は、浄土宗の僧侶という宗教の世界と、アカデミズムの世界という二つの異なる道を、全力で走り続けた人生であった」と回想されるように、研究者と僧侶の二足の草鞋であったが、それを二分化して両立させるというのではなく、両方を次第に接近させ、統合していくような方向を目指した。カントから出発しながら、「厳密な学としての哲学」の方向に向かわず、ヤスパースやデューイなど、実際生活と結びついた哲学を重んじた。西洋哲学から出発しながら比較思想へと向かったのも、仏教者としてのご自身の立脚点を確認しつつ、それを哲学の場を開いていくという意図を持っていたからに他ならない。

本年に入って、親しく教えを受けた方々の手で『峰島旭雄選集』三巻が編集され、北樹出版より刊行された。生前にお手に取ることができたことは、先生の喜びとするところであったらう。この選集には先生の研究のエッセンスが詰まっています、

これほど広い領域をカバーし、新しい分野を切り開いておられることに、改めて驚かされる。例えば、第二巻の『日本近代思想の展開』は、勤務先の紀要である『早稲田商学』に二十年にもわたって連載されたもので、息長く、倦まず弛まず、一貫した構想で明治から昭和に至る思想史を描き切っている。今回初めて全貌が明らかになったが、その構想は雄大であるとともに、新鮮な魅力に満ち、今日改めて考え直すべき多くの問題を提起している。

先生のご逝去は、一つの大きな時代の終焉でもある。比較思想学会草創期の中軸メンバーは、もともと若手であった先生の逝去により、多くが鬼籍に入られた。時代も大きく移り、草創期の比較思想の理念はそのままでは通じなくなっており、むしろ比較という方法への疑念が大きくなっている。しかし、異文化間の相互理解が、今日ほど切実な課題となったことは過去になく、欧米中心主義を超えて、真の哲学思想の構築が要請されている。このような時代にこそ、峰島先生のお仕事と、比較思想学会に賭けた情熱が改めて呼び起こされなければならないと思われるのである。

(1) 峰島旭雄「最終講義 比較哲学の可能性と現実性」(峰島旭雄選集) 三、北樹出版、二〇一三、一〇一—一頁。

(2) 同「はしがき」(峰島旭雄選集)一、北樹出版、二〇一三、iii頁。

(すえき・ふみひこ、比較思想学会会長)